

***** 交 流 会 *****

「交流会」の準備から開催まで

山 岸 俊 男 (やまぎし としお)

交流会部会長 榊キタック

第39回研究発表会の約1年前に交流会部会長を引き受けてから、会員等に会うごとに新潟への来訪をPRしてきました。そのような折に、当学会本部の戸塚氏と下山さんから、「交流部会長びったりだ!」と声をかけられて、それは激励の言葉と受け止め、新潟の交流会を成功させねばと強く感じました。

交流会の準備は、秋田開催の時から始まりました。我々、交流会部員数名で秋田へ行き、秋田の交流会部会長佐々木氏からいろいろとご教授をいただきました。新潟へ戻って1回目の交流部会を開き、オープニングのテーマとアトラクションの案が幾つか提案されましたが、なかなか決定打がなく日数が経過していきました。そして、10月頃になってようやくその内容が決まり、具体的な準備に入りました。交流部会の打合せは、7月7日に始まる研究発表会の2日前まで、13回を重ねていました。

交流会のコンセプトは、「簡素にさわやかな新潟らしさをアピールして、新潟の味を楽しんでいただく」ということを、部員一同が心掛けて企画しました。その内容結果は、交流会に参加された皆様をご覧いただいたとおりです。

交流部会の一番の心配事は、参加人数でした。事前申込みは120名足らずで、研究発表会初日の7月7日お昼頃になっても参加者が約150名程でしかいないため、じっとしていられず展示会場にも交流会の受付コーナーを急ぎょ設置して、出展している企業へ交流会参加のお願いをして回りました。その結果、会員の参加者も含めて196名となりました。前日になってもこのような状況では、交流会の予算は相当の赤字を覚悟しなければならないと思いました。

交流会の当日、隣のコーナーの弁当屋さんが猛烈な売り込みを始めたのをみて、それに刺激され、交流会への参加呼びかけのチラシを掲示したり、再度、展示ブースへ出向き交流会への参加をお願いに行き、その際に地盤工学会のシャーボペンを渡して回ったのは大変有効でした。

交流会当日は、朱鷺メッセでの受付を午後3時で終了し、そこでの参加人数は300名は超えたものの予想を

かなり下回っていました。予定では400名を見込んでいたのですが、3日前のホテルとの最終打合せで若干人数を絞った結果、最終の参加人数は、交流会場前の直前の申込みで総数363名となり、ほぼ修正人数どおりとなりました。

さて、交流会の会場は、研究発表会の朱鷺メッセから2kmほど離れたホテルオークラ新潟です。ホテルでの受付を午後5時に開設して交流会の参加者を待ちました。参加者が次第に3階入口のロビーに集まったので、そろそろ扉を開けようとしたときに、突然、私の携帯電話のベルが鳴り、「朱鷺メッセからの最終水上バスの出発時間が10分遅れるため、開宴を10分遅らせて欲しい」との大川事務局長（新潟大学教授）からの連絡が入りました。

会場入口には、かなりの人が集まって、混雑していたが、「皆様に申し上げます」とその主旨を伝えて、待ってもらうことにしました。また、この時間になっても壇上にて紹介する方が1名、まだ会場入口の受付が済んでいませんでした。最後の水上バスに乗船しているのかと思われ、早く現れて欲しいと願っていましたが、待っている参加者の方々からブーイングが出始めたため扉を開け、会場へ入っていただくこととしました。

オープニングは、スクリーン一杯の花火で迎えたところ、丁度スクリーンの下に参加者の頭の影が写り、花火を見ている雰囲気を一層引き立てており、思わぬ効果がありました。次に、開宴の挨拶等のセレモニーを終えて祝宴に入りましたが、祝辞で時間を超過してしまい、参加者相互の懇親の時間を少々短縮して、終了は予定どおり午後8時としました。次回開催地の北海道からの参加者全員が壇上に集まり、北海道のPRをしていただき、そして閉会の辞を川村支部長（金沢工業大学教授）にお願いして無事終了しました。

交流会を終えた今、実に多くの人達のおかげで交流会を成功させることができたと思っています。最後になりましたが、この交流会にご参加いただいた方々、またご協力いただいた方々に厚く感謝を申し上げます。

(原稿受理 2004.8.30)